

若手研究者のキャリア形成における非常勤講師職の役割

The Role of Part-time Lecturer Positions in the Career Development of Young
Researchers in the Humanities and Social Sciences

林凌* HAYASHI Ryo

中川雄大** NAKAGAWA Yudai

目次

1. はじめに
 - 1.1 問題の所在
 - 1.2 先行研究の検討
 - (1) 非常勤講師職をめぐる問題の構造とその指摘
 - (2) 高等教育研究の検討——能動的なキャリア形成への着目
 - (3) 労働社会学の検討——若手研究者のキャリア形成における非常勤講師職の役割
 - 1.3 本研究の目的・構成
 2. 使用データの概要
 3. 若手研究者が非常勤講師職に就こうとするのはなぜか
 - 3.1 若手研究者が非常勤講師職を求める理由
 - 3.2 非常勤講師職の獲得経路
 4. 若手研究者が非常勤講師職から離脱しないのはなぜか
 - 4.1 若手研究者が過重な労働を引き受ける理由
 - 4.2 若手研究者が非常勤講師職で生計を成り立たせようとする理由
 5. 非常勤講師職への従事と研究者としてのキャリア形成が対立するとき
 - 5.1 非常勤講師職の遂行による研究者キャリアの停滞という認識
 - 5.2 他の研究者とのコミュニケーション齟齬の発生
 - 5.3 非常勤講師職で生計を立てながら研究者を続けることの可能性
 6. 結論
 - 6.1 本研究の知見
 - 6.2 今後の展望——「パラドクス」を脱することはいかにして可能か
- 引用・参考文献

キーワード：非常勤講師、若手研究者、高等教育研究、労働社会学、人文・社会科学

* 日本学術振興会特別研究員（PD）

** 東京大学大学院学際情報学府博士課程

1. はじめに

1.1 問題の所在

日本において若手研究者¹のキャリア形成はおおきな政策的課題・社会問題となっている。特に問題視されているのが、博士後期課程在籍中の経済的不安や、博士後期課程修了後のキャリアパスへの不安である。近年の政策文書において「博士後期課程学生を、安価な研究労働力ではなく『研究者』として適切に処遇するとともに、次代の社会を牽引する人材として育成していく」重要性が指摘されていることは、このことを示している（文部科学省，2021b: 37）。

こうした社会的文脈のなかで、若手研究者のキャリア形成の問題は多くの研究者の関心と呼ぶものとなった。たとえば博士後期課程学生のための指南書を見てみると、若手研究者は長期的なキャリア形成のために、研究以外の経験も積むべきであること、TA や非常勤講師といった業務がそれに資することが述べられている。一方でこの本には以下のような記述もある。「大学院生あるいは大学教員を目指す者が TA や非常勤講師だけに時間を割き、自身の研究の時間を極端に減らすということは本末転倒である……資源を有効活用し、工夫して研究と教育のバランスをとること自体が大学教員への準備ともなる」（吉田・堀内編，2017: 28-9）。この記述は非常勤講師職が、研究者のキャリア形成上教育経験として重視されるが、一方でそれがしばしばキャリア形成を阻害する要因にもなるという、両義的な性格を持つことを示している。

事実、非常勤講師職をめぐる問題はしばしばその劣悪な労働条件（低賃金・高負担など）の指摘を通じて論じられてきた。その詳細については後に述べるが、重要なのは非常勤講師職の労働条件が劣悪であるにもかかわらず、現代日本における人文・社会科学系の若手研究者のキャリア形成を考える上で、非常勤講師職の存在を無視できないことである。

たとえば文部科学省科学技術・学術政策研究所の調査によれば、2018 年度に日本の博士後期課程を終了してその後アカデミア（大学等及び公的研究機関）に就職した人のうち、2020 年の段階で現状の職名として最もあてはまるものを「非常勤講師、嘱託講師」と回答した人は、全体の 4.6%を占める。だが、これを分野別に割合の高い順に並び替えると、最大が「人文」で 26.2%、次に「その他」が 14.7%、「社会」が 8.1%である。これに対し、残りの「理学」「工学」「農学」「保健」における「非常勤講師、嘱託講師」の割合は、いずれも 1%未満に過ぎない（文部科学省科学技術・学術政策研究所，2022: 43-4）。同報告書は、自由記述欄から「非常勤講師のみでは事実上餓死すらしかねない」非常勤講

¹ 文部科学省等は「若手研究者」に明確な定義を与えていないが、概ね博士後期課程から中堅・シニア研究者に至るまでの過程が若手研究者として想定されている（文部科学省，2021b）。本研究では博士後期課程からテニユア職に就いていない研究者を「若手研究者」として捉え、調査対象とした。

師への待遇改善への要求や、講義準備等によって、「研究する時間のみならず心身ともに触まれている」という声が複数寄せられたことを伝えている（文部科学省科学技術・学術政策研究所，2022：64）。学振PDや任期付き職などのポジションにあるこれら領域の若手研究者が、非常勤講師職も同時に遂行する事が多いことを鑑みれば、本職をめぐるこうした問題の対象者は非常に多いことが予想される。

つまり、少なからぬ人文・社会科学系の若手研究者が非常勤講師職に従事しており、場合によってはそれを主たる生計手段とすること（専業非常勤講師²になること）で、研究者としてのキャリア形成を行おうとしている。しかし、先述したとおり非常勤講師職の労働条件は決して良いとは言えず、当事者から「餓死すらしかねない」と非難される状況にある。ではこうした困難を抱えながら、若手研究者はいかにして自らの生活・研究活動を成り立たせているのだろうか。つまり、彼ら彼女らはいかにして非常勤講師職を遂行しながら、研究者としてあり続けることができているのか。

本研究の目的は、この観点から現代日本の人文・社会科学系研究者のキャリア形成における非常勤講師職の役割を、当事者の語りを通じて明らかにするものである。

1.2 先行研究の検討

(1) 非常勤講師職をめぐる問題の構造とその指摘

非常勤講師職をめぐる問題は、当事者である人文・社会科学系の若手研究者によって、強く焦点化されてきた。それゆえ、非常勤講師職をめぐる問題については、おおむね論点が整理されている。以下ではその概要を述べ、先行研究の問題点を指摘する。

非常勤講師職をめぐる問題が注目を集めるようになったのは、博士後期課程学生の就職難が「高学歴ワーキングプア」（水月，2007）として概念化された2000年代後半以降である。この概念を提示した水月の議論は影響力をもち、非常勤講師職に就く若手研究者の状況が社会問題化していくとともに、マイノリティである女性若手研究者の苦境なども次第に訴えられるようになっていった（大理，2010）。

こうした経緯からも分かる通り、非常勤講師職については、その困難と構造的問題の記述が試みられてきた。具体的には、①低待遇（低賃金、業務外の仕事、突然の契約打ち切り）、②採用プロセスの不透明さ（それに伴う権力、あるいは機会の不公平）などが主たる問題として指摘されている。ケイン（2020：21-25）が述べるように、非常勤講師職の「立場は不安定」であり、賃金も安い。しかし、だからこそ若手研究者は、際限なき「時間外

² 本研究において、専業非常勤講師とは博士号を取得、あるいは博士後期課程を満期退学したのち、非常勤講師職によって主たる生計を立てている人のことを指す（本研究の場合Aさん、Gさんが該当）。また、本研究では先行研究の区分に従い、専業非常勤講師と博士後期課程に在籍しつつ非常勤講師によって主として生計を立てている人（Dさん）を所属の有無という点から区分しているが、DさんとGさんやAさんが抱えている問題は類似であるように思われた。

労働」を通じてしか、「仕事がなくなる」不安を解消することができず、自発的に「やりがい搾取」の渦の中に巻き込まれていく。ケインはこのような若手研究者の「搾取」が、自己責任的な大学風土と、その背景にある政治主導の大学改革によって助長されていることを批判する。

また上林（2021：77）は、専務教員の数が減少傾向にあるのに対し、それを補うように「本務なし非常勤講師」の数は1989年以降増加し続け、専業非常勤講師の割合は大学教員の3分の1まで及んでいること、特に私立大学における専業非常勤講師への依存は顕著であることを指摘している³。つまり、専業非常勤講師というポジションは、変容する大学経営の副産物として生じたものであり、決して個人個人の研究者の問題として片付けられて良いものではない。上林は、この見地より専業非常勤講師の雇用のあり方を改善する社会的方策が求められると論じている。

本研究は、こうした知見を否定するものではない。だが一方で先行研究には、共通する課題がいくつか存在するとも考えている。

第一に、これらの研究は、非常勤講師職の労働条件の劣悪性を問題視するがあまり、それでもなお若手研究者が非常勤講師職を求める理由を十分に説明していない。もちろん、先行研究がこの点に触れていないわけではない。たとえば熱田（2014）は、研究のために信頼を担保したり、研究リソースへのアクセスを可能としたりする「非常勤講師」という肩書の維持が重要であることを指摘し、若手研究者が非常勤講師を希望する理由を示してきた。しかしこれらの議論では、若手研究者の困窮状況の記述が重視されてきたため、PD⁴やDCに代表される「肩書」を持ち、金銭的に比較的恵まれた若手研究者であっても非常勤講師を求めている理由が説明されていない。若手研究者の継続的な非常勤講師職への参入が、非常勤講師職の低待遇を維持する要因の一つであると考えられることも踏まえれば、なぜ若手研究者は非常勤講師職に就こうとするのかがより詳細に検討される必要がある。

第二に、上記の論点とも関連するが、先行研究はいかにして若手研究者が非常勤講師として生計を立てるようになるのか、という点を十分に説明していない。つまり、非常勤講師職を主たる生計手段とすることの困難が強調されるがあまり、そもそもなぜそのような境遇に追い込まれてしまうのか、という具体的なプロセスが論じられていないのである。非常勤講師職への従事は人文・社会科学系において広く見られ、必ずしもすべての若手研究者が同様の問題を抱えているわけではない。また後述するように若手研究者の非常勤講

³ もっとも、これは非常勤講師の延べ人数（同じ人間が複数の大学で別々にカウントされている）であるため、研究者の3人に1人が専業非常勤講師とはならない。いずれにせよ、専業非常勤講師は大学教員のうち多くの割合を占めているのは確かである。

⁴ PDは日本学術振興会が採用する特別研究員のうち、博士学位取得後5年未満の者が申請可能な区分で、任期は3年間である。そのほかに、博士後期課程在籍中の研究者が申請可能な区分として、DC1（採用期間3年）、DC2（採用期間2年）がある。本研究では当該身分の研究者をそれぞれPD、DCと呼称している。

師職をめぐる問題の認識も、時間の経過に伴い変化する。よって先行研究で指摘されたような問題に、若手研究者が直面するようになるプロセスがまず描かれる必要がある。この作業を通じて、なぜ若手研究者は待遇面などに不満を抱えながらも、非常勤講師職に従事し続け、それによって生計を立てようとするのかという点が記述されなければならない。

(2) 高等教育研究の検討——能動的なキャリア形成への着目

以上2点より、本研究は先行研究が記述の前提としてきた状況こそが、どのようにして生じるものなのかが、当事者の語りを通じて分析されなければならないと考える。

そのために、まず参照したいのが近年の高等教育研究の知見である。新自由主義的な大学経営手法の広がりによって若手研究者のキャリアがきわめて不安定なものになっていることは、欧米でも強く問題視されてきた。そのなかで、若手研究者、特にポスドクのキャリアはたんに知的能力だけではなく、対人関係や社会制度などさまざまな文脈のなかで左右されることに、関心が集まるようになった(Wöhler, 2014; Skakni, 2018)。

他方で、個々の研究者がそうした社会的条件に完全に従属する存在とみなすことも適切ではない。というのも、同様に就職状況が悪い環境であっても、個々の研究者は自らの判断で将来に対して見通しを持ったり、周囲の資源を活用したりして異なる行動を選択することで、キャリアを形成するからである(Chen et al., 2015: 1091)。こうした知見を踏まえるのなら、非常勤講師職の役割とその問題は、若手研究者が能動的にキャリア形成を行っていくという、若手研究者の視点に即して記述される必要がある。

だが、高等教育研究が注目する欧米の大学環境と日本のそれとは差異があることにも注意しなくてはならない。たしかに、これらの研究の背景にある博士後期課程院生やポスドクの苦境は、日本にも見られる問題である。しかし、欧米の高等教育研究において関心が向けられているのは、「低給の研究職」たるポスドクの継続であり、キャリアの維持・発展・退出の観点から、個々人がいかにポスドク職を捉えているのかが問われてきた。だからこそ、先行研究は彼らがいかにして情報収集し、人脈を構築することで、将来のテニューアに向けたキャリア形成を可能にしているのかを分析してきた(Chen et al., 2015)。

だが、これら高等教育研究において問題となっているのは、若手研究者が「低給の研究職」をいかに継続するのかということであり、「低級の教育職」に対する着目はなされていない。つまり、英語圏の先行研究において「教育」は扱われたとしても、研究室内の大学院生の指導や、任期付きポストにおける講義負担などに議論が限定されているため、日本の非常勤講師職と類似の問題が考察されているとは言い難いのである⁵(McAlpine, 2014)。したがって、薄給で授業を受け持ちつつ、残りの時間で研究を継続しなければならない日

⁵ その結果、英語圏の研究では教育経験は研究職としてのキャリア形成の付加資源としてしか捉えられておらず、それがキャリアを阻害する可能性があまり想定されていない傾向にある。

本の人文・社会科学系の若手研究者の境遇を記述する上で、先行研究の議論をそのまま用いることはできない。若手研究者のキャリア形成における非常勤講師職の役割と、その問題点を探るためには、非常勤講師職がキャリア形成にとって不利になりうる状況であったとしても、当人がそれをなぜ継続するのが明らかにされなくてはならないのである。

(3) 労働社会学の検討——若手研究者のキャリア形成における非常勤講師職の役割

そのために本研究では、労働社会学の知見を参照する。というのも、この分野の先行研究は、一見待遇が悪いと思われる労働条件において労働者がなぜ働き続けているのかを、「当事者の論理」（松永，2020：v）に注目した質的調査によって明らかにしてきたからである（松永 2017；野村，2019）。

そのなかで、特に本研究が着目するのは、野村（2019）が示した、バンドマンの「職業達成過程」⁶における諸活動の負の効果である。バンドマンは、自らの職業達成（＝バンドが売れる）のために、ライブハウスやバンドからなる「夢追いネットワーク」のなかでさまざまな活動（ライブ出演機会獲得のための業界関係者とのコネクション維持等）を行う。ところがそうした活動の結果、「夢追いネットワーク」に過度に順応することで、ライブハウスでの過度な無賃労働や、現状の「ネットワーク」のしがらみからより大きな規模のライブハウスでライブをしなくなるなどの、「職業達成」に反する行動をバンドマンは取るようになる。野村はこの「職業達成」のための活動がいつしか「職業達成」を阻害するようになるプロセスを、「夢追いネットワーク形成過程のパラドクス」と称している。

こうした「バンドマン」の「職業達成過程」における「パラドクス」は、非常勤講師に就く若手研究者にも同様に当てはまる可能性がある。というのも、後述するように、非常勤講師職はたんにそれが賃金を得るための労働としてあるわけではなく、若手研究者のキャリア形成における教育経験獲得の契機としても位置づけられている点に特徴があるからである⁷。「大学院生あるいは大学教員を目指す者が TA や非常勤講師だけに時間を割き、自身の研究の時間を極端に減らすということは本末転倒」という指摘は、非常勤講師職のこの性質を指している。

つまり、若手研究者はキャリア形成のために非常勤講師職を求めるが、それはときにキャリアの停滞を招く可能性もある。この非常勤講師職をめぐる「パラドクス」への対処方針は、キャリア形成における非常勤講師職の役割に対する認識と、それにもとづく個人の選択に委ねられている。したがって、若手研究者のキャリア形成における非常勤講師職の

⁶ 野村の「職業達成過程」への注目は重要であるが、その中核となる「職業達成」という概念は、何をもちいて「達成」となるかが曖昧である。そのため本研究では以下、この問題について触れる場合は基本的に「キャリア形成」と称している。

⁷ 本研究はこれを非常勤講師職の二重の役割と呼称する。以下で「二重の役割」という言葉が用いられている場合は、この意味で用いる。

役割を理解するためには、非常勤講師職をどのように認識し、それがもたらす問題にどのように対処しているのかについて、個々の若手研究者の視点から示すことが必要となる。

1.3 本研究の目的・構成

そのために、本研究では若手研究者を対象にインタビュー調査を行う。そして、キャリア形成のための非常勤講師職の遂行が、キャリア形成を阻害するようになるのはなぜかという点を、「当事者の論理」に着目する形で明らかにするという方針を採用する。この方針から、以下の3つの論点を検討する。

第一に、若手研究者が非常勤講師職を求める理由を明らかにする。非常勤講師にさまざまな問題があることを知っていながら、若手研究者はなぜ非常勤講師職を求めるのか。そしてそれはいかなる過程のもと獲得されるのか。本研究はこれらの点をインタビューの語りを通じて明らかにすることで、若手研究者が非常勤講師職を求めようとする理由を、本職の二重の役割（教育経験/賃労働）という観点から捉え、分析を行う。

第二に、若手研究者が非常勤講師を継続する理由を明らかにする。非常勤講師職は低賃金であると知られているにもかかわらず、若手研究者はなぜ本職の従事に多くの時間を費やし、かつそれを継続しようとするのか。本研究はこれらの点について、非常勤講師職の二重の役割が、彼ら彼女らが持つ「教育規範」と非常勤講師職の継続の意向に与える影響を明らかにすることで、分析を行う。

第三に、先行研究が指摘してきた非常勤講師職への従事に伴う困難が、いかにして生じるのかを明らかにする。若手研究者はキャリア形成のために、教育活動だけでなく研究活動も同時に進めなければならない。だが非常勤講師職の継続は、先行研究で論じられてきたように研究活動への集中を難しくする。このような「パラドクス」のなかで、若手研究者はいかなる困難に直面し、対応しているのか。本研究はこの点について、先行研究が指摘してこなかった若手研究者の能動的な問題解決の手法に着目することで、分析を行う。

以上の目的を踏まえ、本研究の構成を述べる。2章では、本研究で用いるデータの概略と、その取得経緯について述べる。3章では、若手研究者がいかなる理由・経緯のもと非常勤講師職に就こうとするのかを検討する。4章では、いかにして若手研究者が非常勤講師で生計を成り立たせようとするようになるのかを、若手研究者の非常勤講師職に対する認識の変化から検討する。5章では、非常勤講師職の従事に伴う「パラドクス」がいかにして生じるのかを論じた後、そうした問題に対する若手研究者の対応のパターンを検討する。6章では以上の分析を踏まえ、人文・社会科学系若手研究者のキャリア形成過程において、非常勤講師職の果たす役割は大きいことを論じた後、「パラドクス」を回避する手段として研究者ネットワークのなかで共有されている知識が重要な役割を果たしている可能性があることを述べる。

2. 使用データの概要

本研究において用いられたデータの収集経緯は以下のとおりである。まず、インタビューを実施する以前に、林は 2019 年度、「若手研究者のキャリアラダーに関する調査」⁸を行い、調査対象者に対するインタビュー調査の可否を聴取していた。この調査は若手研究者のキャリア形成において、当事者において何が重視されているのかをインターネット上のアンケートを通じて探索的に調査したものである。本研究ではこの調査に参加していただいた方のうち、「インタビューに答えても良い」と答え、現状のアカデミア上での地位が「専業非常勤講師」・「博士後期課程院生」であり、かつ現状非常勤講師職に就いていると答えた人文・社会科学系研究者のうち、ジェンダー・研究領域の多様性を考慮した上で、8名を対象に個別インタビューの依頼を行った。結果、7名（29～35歳）よりインタビューに関する許諾が取れたため、2020年11月中旬から12月上旬にかけて、林・中川両名により半構造化インタビューを行った（質問内容については表 2.1、インタビューの属性については表 2.2 を参照）。本研究を行う際には改めて対象者全員に連絡を取り、プライバシーの守秘とオプトアウト、結果の利用等について説明した上で「若手研究者のキャリアラダーに関する調査」ではない本研究についての協力の可否について確認した。また、希望者を対象に2次ファイル及び本論文投稿についての確認・修正・了承を取った。

表 2.1 インタビューーに対する質問内容

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">□ 本研究の調査目的全体に関わる質問項目<ul style="list-style-type: none">➤ 研究者歴・研究会や学会への参加度合➤ 生活状況・収入手段（非常勤講師、その他のアルバイト、原稿執筆）□ 3章における議論（非常勤講師職への就任理由・経緯）に関わる質問項目<ul style="list-style-type: none">➤ キャリア形成における非常勤講師職の位置づけ➤ 非常勤講師への応募歴・就任経緯（公募・非公募双方）➤ 非常勤講師職の具体的内容（勤務校、期間、賃金等）□ 4章における議論（非常勤講師職の継続理由）に関わる質問項目<ul style="list-style-type: none">➤ 非常勤講師職を遂行する上での教育面での留意事項➤ 非常勤講師を続けていったことによる心境の変化□ 5章における議論（非常勤講師職の遂行による困難の発生）に関わる質問項目<ul style="list-style-type: none">➤ 非常勤講師職従事による研究者キャリアへの影響の有無➤ 非常勤講師職従事に関する負担の具体的内容（時間的負担・金銭的負担・心理的負担）と、それへの対応策 |
|---|

⁸ 本調査は林が行った academist クラウドファンディング「人文・社会科学分野の若手研究者が抱えるキャリアの問題とは？」の達成に伴うものである。調査概要については林（2020）を参照のこと。

こうして得られたインタビューデータについては、音声を文字起こしした後に、その内容を双方が確認し、匿名化処理を行った。その際、整合性が不明な点については別途インタビューに確認し、それを踏まえデータの確定を行った。本研究は、このデータを筆者二人が共有した上で分析したものであり、各章の内容はすべて共同執筆によるものである。なお、以下で示される分析内容は、調査の結果得られた知見を総合的にまとめたものであるが、全体の傾向と異なる意見が一部のインタビューによって述べられた場合は、注でそのことを示すとともに、その理由について考察し、分析の多角化を行うよう努めている。

表 2.2 インタビューの属性（2020年12月当時）⁹

名前	A ¹⁰	B	C	D	E	F	G
出身大学院の種別	関西・私立	首都圏・国立	首都圏・国立	中部・国立	首都圏・私立	関西・私立	首都圏・国立
現況ポジション	専業非常勤講師	学振PD	学振PD	博士後期課程	博士後期課程・学振DC2	博士後期課程	専業非常勤講師
居住地域	関西	首都圏	首都圏	中部	首都圏	中部	首都圏
通期非常勤コマ数概算	8	9	2	12	4	6	12.5
非常勤講師職による収入額概算（月平均 ¹¹ ）	8.5万	9.5万	2.25万	15万	4.5万	7.5万	15万
非常勤講師職以外の収入源	塾講師	学振PD	学振PD	家庭教師	学振DC2	無し	無し
非常勤講師就任年度	2018年	2018年	2019年	2016年	2017年	2018年	2018年
インタビュー日時	2020年11月19日18時	2020年11月24日11時	2020年11月24日14時	2020年11月25日14時	2020年1月25日16時	2020年12月8日15時	2020年11月28日11時

⁹ 各若手研究者の性別と具体的な研究分野については、プライバシー保護の観点から省略している。そのため、本研究においてはジェンダーや研究分野の差異といった観点からの分析は行っていないが、本文中にあるようにこれらの属性についてはできるだけ偏らないようにインタビューを選定した。なお、調査対象者のうち男性は4名、女性は3名である。

¹⁰ Aさんは2020年度より専任教員として勤務しているため、インタビューは2019年度までの状況を回顧する形で行った。そのため図表データは2019年度のものである。

¹¹ ここでの月平均とは、非常勤講師職を遂行することによって得られるであろうと想定される年収を、一月あたりに換算したものである。実際には、セメスターによって請け負うコマ数が異なったり、大学によって提示される額が異なっていたりするため、この額が毎月得られるというわけではない。また本額はインタビューデータから推測された概算額であることに留意されたい。

3. 若手研究者が非常勤講師職に就こうとするのはなぜか

3.1 若手研究者が非常勤講師職を求める理由

まず、若手研究者が非常勤講師職に就こうとする理由を確認したい。非常勤講師職に就く理由として多くの場合述べられたのは、キャリア形成のため教育経験を得なければならないというものであった。非常勤講師職を務め教育経験を得なければ、いくら研究業績があってもアカデミックポストに就職できないという認識は、若手研究者の非常勤講師職を求める理由と密接に結びついていた。

こうした認識は、今回インタビューを行った若手研究者全員に共有されていたが、このような情報は多くの場合指導教員や、先輩の院生からもたらされていた。したがって、若手研究者のキャリアにおける非常勤講師職の持つ特有の役割は、研究室や研究会のなかで共有されていたと言える。

よって、非常勤講師職を得ることができるかどうかという点は、若手研究者にとって自らのキャリア形成と直結した問題であるとしばしばみなされていた。たとえばBさんは博士後期課程時に感じたキャリア形成をめぐる焦燥が、非常勤講師職の有無と密接に結びついていたものであることを述べている。

自分の指導教員の先生からは、あんまり焦ってもしようがないから、とりあえず博論を書くべしというふうには言われていたんですけども、博論書きながらもやっぱりお金のことがすごく心配で、本当にこのキャリアとして、非常勤があるかないかっていうのも、最初そのポストク以降やっていけるかどうかの基準になってくるので…周りの人がコマ持ってるのに、私は持ってないということはやっぱり、研究者としてのキャリアで遅れを取ってるんじゃないかみたいな焦りもあり、そういう中でなんか厳しいというか、辛いなみたいなところはありましたね。

ここで重要なのは、この時期BさんはDC2に採用されており、金銭的な面では問題を抱えてはいなかったという点である。つまりBさんにとって非常勤講師職の獲得は、現状の金銭的問題の解決策ではなく、「ポストク以降やっていけるかどうかの基準」を示すものとして理解されていた。特に指導教官から博論に集中すべきという助言を受けているにもかかわらず、Bさんには非常勤講師職獲得に対する危機感が生じていた。このことは、Bさんにとって当該職に就いているかどうか、自らのキャリア形成状況を示すベンチマークとなっていたことを示している。事実Bさんは、周りの若手研究者が非常勤講師職を獲得しているように見えたことによって、自らのキャリアが「遅れ」たものであると感じ、それを早急に埋め合わせなければならないという「焦り」をもってたと語っていた。

実際、今回聴取した若手研究者は、初任の非常勤講師職を自らのキャリア形成にとって必要なものとして捉える一方で、労働対価としての賃金の低廉さを問題視しない傾向にあった。たとえば、Cさんは非常勤講師職に就く理由を、「キャリアのため」であると明言し、その理由は就職時に教育経験が求められるという情報を指導教員から聞いたことでもたらされたと述べている。収入に関しては「少なすぎるんで1コマぐらいじゃ話にならない」と述べていたことから分かる通り、Cさんにとって非常勤講師という仕事は、教育経験の確保を目的としたものであり、収入を目的としたものではなかった¹²。

このように、若手研究者の中で非常勤講師職は、収入目的の労働としてよりも、キャリア形成上獲得されなければならない経験として捉えられていた。これは、本職の低賃金性が収入目的という認識を困難にすることに由来しているが、教育経験の有無が「ポストク以降やっていけるかどうかの基準」として理解されていることを示しているといえる。

3.2 非常勤講師職の獲得経路

だが、初任の非常勤講師職を得るのは、収入の低廉さを気にしないとしても容易ではない。特に教育経験のない状態で、最初の非常勤講師の機会を得ることは極めて難しいというのは、首都圏在住者のインタビュー（B、C、E、G）のなかで共通した見解であった。そのため本地域に居住する研究者は、知り合いの研究者や指導教員から非常勤講師の機会が与えられる際に、それを積極的に受容することになる。たとえば首都圏に居住するEさんは、自らが非常勤講師職を斡旋してもらったとき、「非常勤を持ってなくて困ってる」別の先輩のことを想起し、「最初に声かけてもらった時点で、これ絶対断らない」と判断したこと、その際「金額は全く考えて」いなかったと回顧している。あるいはBさん、Cさん、Gさんの場合には、非常勤講師を探していることを積極的に周囲の研究者（知り合いの教員、研究室の先輩）に伝えることで、非常勤講師の獲得にこぎつけていた¹³。

そのため今回聴取した若手研究者は当該学科の教員や、既に科目を担当している講師の強い推薦や紹介が、非常勤講師職を得るのに必要になると語る傾向にあった。事実、表3.2.1を見れば明らかなように、今回インタビューを依頼した若手研究者は、全員が指導

¹² むろんこうした見解は、1コマの非常勤講師職がそれ単体のみで生計を立てられるほどの収入をもたらさないことにも起因している。今回インタビューに対し非常勤講師1コマあたりの収入額を聴取したところ、大学ごとに大きなばらつきがあったものの、概ねその額は1ヶ月あたり2万円前後（総額10万円～15万円程度）であった。当然のことながらこの程度の収入では、生計を成り立たせることは難しい。

¹³ 他方で、こうした語りは、特定の地域のみで言える現象の可能性もある。たとえば中部地方に居住するDさんは、非常勤講師職はいわば先輩から「降りてきた」ものであり、特段の苦勞を要するものではなかったと述べている。また「降りてきた」内実について、Dさんは「基本的に上の先輩がやってた非常勤が、その方が卒業されて修了されたりしたら降りてくる」と説明をしていた。Dさん自身が「東京とかだと全然違うと思うんですけど、これ〔別の科目〕も持てるみたいな感じで結構大学から振られることがあって」と述べている。このように、非常勤講師職の得やすさについては、地域的要因も相当影響していると考えられる。

教員や研究科の先輩などからの推薦によって、初任の非常勤講師職を獲得していると答えた。これは、非常勤講師職の獲得・譲受が、キャリア支援ポータルサイトである JREC-IN や学会ホームページを通じた公募などよりも、インフォーマルな研究者ネットワークのなかで行われていること¹⁴、さらにそうした状況を踏まえた上で、若手研究者が非常勤講師職を得ようとしていることを示唆している。

表 3.2.1 初任時の非常勤講師職獲得方法

名前	A	B	C	D	E	F	G
非常勤講師職を得た地域	関西	首都圏	首都圏	中部	首都圏	中部	首都圏
初任時の非常勤講師職の推薦者	指導教員	研究会に参加している教員	研究科の先輩	研究科の先輩	修士課程時の先輩	修士課程時の先輩	研究会に参加している研究者
初任非常勤講師職の推薦経緯	所属研究科からの依頼	前任者の急な辞職による教員からの依頼	先輩の多忙による非常勤講師退職	先輩の非常勤職就職による非常勤講師退職	先輩の非常勤職就職による非常勤講師退職	先輩の非常勤職就職による非常勤講師退職	研究者の非常勤職退職による非常勤講師退職
初任時非常勤講師職の科目内容 ¹⁵	大学1年次を対象とした実習科目	大学2年次以降を対象とした講義科目	大学1-4年次を対象とした講義科目	専門学校における講義科目	大学1年次を対象とした講義科目	専門学校における講義科目	大学2年次以降を対象とした講義科目

¹⁴ 本研究にて「研究者ネットワーク」は、指導教員、研究室の先輩後輩、研究会のメンバーなど、AさんからGさんの初任時の非常勤講師獲得経路（表3.2.1）を包括する概念として使用している。これらに共通するのは、お互いの人柄と研究内容を一定程度知っている間柄という特徴だろう。その知っている程度がどのくらいであれば紹介が可能となるのかについては、本研究の限られた事例から導くことは難しい。ただ、研究会に所属していればその分、非常勤講師職が依頼されやすくなるとGさんは語っていた。もちろん、この「研究者ネットワーク」はたんに非常勤講師職を得るためだけでなく、共同研究などへの勧誘も可能にする。ただし、それは必ずしもキャリア形成に資する場合だけではない（→5.2）。また、この「研究者ネットワーク」における情報交換が、個々人のキャリア形成に及ぼす影響については、本研究の知見をもとにした今後の課題として提示している（→6.2）。

¹⁵ 科目区分に関する公的規定は1991年に撤廃されているため（文部科学省、2021a: 60）、ここではインタビュー内容と対象科目のシラバスを照合し、各インタビューの担当科目を科目の性質（講義/実習）、配当年次の観点から分類し記載している。

こうした非常勤講師職の獲得・譲受の形態が取られるのは、非常勤講師職の公募が少なく、また経験がない若手研究者が採用される可能性が低いためである¹⁶。事実、BさんやCさん、Gさんはまだ非常勤講師職に就いていないときに、公募に応募した経験があるが、いずれも面接などの二次選考にすら進んでいないと語っていた。これらの事象を鑑みると、現状若手研究者が初任の非常勤講師職を得るためには、多くの場合何らかのコンネクションが必要であると考えることができる。

もっとも、こうした非常勤講師職の差配がインフォーマルな形で行われていることは、若手研究者にとって必ずしも悪いことばかりとは言えない。研究者が非常勤講師職を斡旋することによって、緊急度が高い若手研究者に非常勤講師職が渡るようにする慣行が、研究者の間に存在するためである。たとえば、Gさんが最初の非常勤講師職を求めていたとき、Gさんは収入面に不安を抱えていただけではなく、博士後期課程を満期退学したことによって研究者としての所属が不安定な状況にあった。だからこそ、Gさんに非常勤講師職を渡す際には、紹介した講師によって確実にわたるような工夫がなされたという。これら非常勤講師職の斡旋をめぐる行われている諸活動は、非常勤講師職がアカデミア内の(相対的)困窮者に行き渡るようにするという点において、若手研究者に対するインフォーマルな支援となっていると考えることができる。

他方でこのことは、先行研究が指摘するように非常勤講師職の譲受をめぐり、権力関係が発生しうることを示唆している(熱田, 2014: 201)。しかし、非常勤講師職が教育経験獲得のために研究者のなかで求められる傾向にあること、後述するように、収入を必要とする若手研究者が多くのコマを抱えようとする傾向にあることによって、先輩や指導教員からの依頼は問題となりにくい¹⁷。

本研究の観点より重要なのは、少なくとも今回調査対象とした若手研究者や、彼ら彼女らに非常勤講師職を斡旋した研究者が、非常勤講師職を教育経験の獲得のために必要な経験であると同時に、金銭的に困窮した研究者に対し渡されるべき賃労働としてもみなしていることである。この非常勤講師職の二重の役割は、本職が低廉な賃金でありながら若手研究者に求められる理由であると考えることができる。

¹⁶ たとえば、初任の非常勤講師職を得るにあたって多くの苦労を重ねたGさんは、その後の非常勤講師職の獲得については「資格はクリアできるので、全然普通に、候補にしたけどだめだったみたいなのは、それ以降は聞いてない」と答えている。

¹⁷ 2020年度は多くの大学で新型コロナウイルスの影響によりオンライン授業となった。移動負担の減少もあり、類似科目であればコマ数の増加はそれほど負担にはならなかったという意見もみられた(Dさん、Eさん)。もちろんこれは一般化できるものではなく、オンライン授業によって教材の作り直しや(Bさん)、機材等の準備も含め負担が増加したという声も上がっており(ケイン, 2020)、ハイブリッド授業の負担が重いことはGさんも述べている。こうした若手研究者が持つ経験の差異は、各大学の教務体制が極めて異なることを示す証左であろう。他方で、対面授業が復活した場合、現状のコマ数を維持した上で教育と研究のバランスを取ることができるかは不透明であるという意見は、DさんやEさんなどコマ数を多く持っている若手研究者から聞かれたことは特記しておきたい。

4. 若手研究者が非常勤講師職から離脱しないのはなぜか

4.1 若手研究者が過重な労働を引き受ける理由

このような非常勤講師職の二重の役割は、若手研究者がなぜ非常勤講師職の従事にあたり、多くの時間を費やすのかを説明する。つまり、非常勤講師職は、収入を得るための労働である一方で、キャリア形成のために必要な経験としてもみなされているがゆえに、若手研究者は過重な負担を背負い込むのである。

こうした自発的な負担発生の背景には、講義内容の裁量の大きさが関わっている。特に初任時は一から授業資料を作成しなければならない都合上、多くの時間を授業準備に費やす必要がある。たとえばEさんは先輩から紹介を受けた教養系の講義科目について、「好きなことを教えればいいよ」というアドバイスによって、自らの専門に寄せて授業を進めることになった。だが、その結果資料にこだわるがあまり、多くの負担を抱え込むこととなったと語っていた。またCさんは、初任の非常勤講師職で学生の「記憶に残る授業」を目指すために、教材として漫画やアニメなどを用いたり、毎回の授業前に学生のコメントシートをすべて読み、興味深いコメントを紹介したりするなどさまざまな趣向を凝らしていたと述べている。

また、この非常勤講師職における裁量の大きさは、採点などの学生評価に関する過重な負担とも直結する。事実Cさんは先述した初年度受け持った科目では300人を超える受講生がおり、コメントシートを読むだけで一苦勞であったこと、学期末には数週間もかけて採点業務を行う羽目になったことを語っていた。またEさんも同様に、数十人規模の授業におけるレポート採点に、3週間程度かかったといったエピソードを述べている。

こうした語りからは、若手研究者が共有している教育規範が見えてくる。彼ら彼女らは「こうあるべき」という大学教育像を有しており、それに即して非常勤講師職を遂行し、そのために多くの時間を費やす。このように賃金を度外視した労働が若手研究者にとって許容できるのは、非常勤講師職がキャリア形成に必要な教育経験を得るためのものとして位置づけられているからにほかならない。（特に初任時における）若手研究者の非常勤講師職に対する取り組み方は、学生に対し（彼ら彼女ら自身の考えに基づいた）適切な教育が与えられるべきだという教育規範に基づいている。

よって今回の調査対象者のうち、非常勤講師職歴が比較的浅い若手研究者は、人文・社会科学系において重視されている文章記述・文章読解に注力した教育を自発的に行い、かつそうした教育手法を取ることによる業務量の増加を当然のものとして引き受ける傾向にあった。たとえば、Fさんは「歴史は暗記」と捉えている理系の学生に対し、「試験で記述問題多めにするとか、細かい話じゃなくて大きな流れで歴史を理解しているかを問う問題を多めに」したり、「〔科目と関連した新書の〕内容〔を〕要約して、で、論評しよう

という課題」を出したりすることによって、「社会科学というものが世の中には存在する」ことを教えようとしていた。

また E さんは、先述した教養系講義科目で、採点に手間がかかるレポート課題をわざわざ課している理由を以下のように答えている。

私の感覚では、なんというか、論述ができるっていうことをやっぱり最終目標に置きたいなって思ったので。それはもうなんか、自分の教育的な根源というか、魂なのかもしれないんですけど。仮にテストの方式を取るとしても論述方式でしか、ちょっとやれないかなと思っている感じがあって。

こうした語りからは、今回調査した若手研究者にとって、非常勤講師職の遂行においてあるべき教育像の実現がしばしば第一目標となっていることを見て取ることができるだろう。むろん、彼ら彼女らが非常勤講師職を遂行するにあたって、得られる賃金とそれに対応した労働時間の関係を全く考えていないというわけではないし、現状の賃金に満足しているというわけでもない。ここで重要なのは、若手研究者が最初に非常勤講師職を求める際に、教育経験の獲得という収入以外の要素を優先していることである。この際「教育経験」とは、しばしば当事者の中でテニユア職応募の際に求められる教育歴としてだけでなく、自らの考える良い授業の実施経験という意味を含んだものとして捉えられている。それゆえ若手研究者は職務遂行にあたって、特に非常勤講師の初期において負担量をあまり考慮せず、自らが持つ教育規範に即した教育を行う傾向にある¹⁸。

4.2 若手研究者が非常勤講師職で生計を成り立たせようとする理由

他方、こうした非常勤講師職に対し多くの労力をかけようとする試みは、若手研究者が非常勤講師職に就いて月日が経つにしたがい、次第に減っていくことに留意しなければならない。さまざまな大学で講義を繰り返すなかで、彼ら彼女らは非常勤講師職を、キャリア形成に必要な経験ではなく、生計を維持するための労働の一つであると考えようになる。本職はこのような過程のもと、その低賃金性ゆえに先行研究で指摘されてきたような、

¹⁸ もちろん、この教育経験の獲得の際に、自らの理想とする授業をどれだけ実現しようと試みるかは個々人の研究者次第であり、すべての若手研究者が自らの教育規範に基づいて過重な労務負担を抱え込むわけではない。常勤職の獲得において教育経験が求められることはあっても、その取り組みの詳細が採用の決定打になることは考えがたく、当初から効率化を意識して業務を遂行するケースもありうるからだ。事実、G さんのような非常勤講師職に対し賃金獲得としての側面を当初から期待していた若手研究者は、最初から過重な業務負担が発生しないように工夫を凝らしていたと述べていた（→ 5.3）。ただし重要なのは、そうしたケースであっても、ほかの若手研究者において見られたような教育規範を完全に放棄していたわけではないということである。D さん、G さんといったコマ数を多く抱えている若手研究者が業務効率化について語る際でも、彼ら・彼女らは一定の教育効果の維持を前提としていた。

「搾取」とみなされるものへと当事者の中で転換していく（ケイン，2020）¹⁹。

では、なぜこのような転換が生じるのか。その理由は、教育経験獲得の契機としての非常勤講師職の役割は、経験を積むにつれ次第に薄れていくからである。今まで触れてきたように、若手研究者が非常勤講師職の獲得を望む理由は教育経験という点に求められていた。それゆえ、彼ら彼女らによって労働条件の優先順位は低かった。だが、教育経験の獲得という利益は、従事年数が増え、担当するコマ数が増えるにつれ、相対的に薄れていくこととなる。教育経験の蓄積そのものは、研究業績の蓄積に比してアカデミックポスト獲得の際に有利とならないという認識は、今回調査対象とした若手研究者全員から聞かれたものであった。

こうした若手研究者の非常勤講師職をめぐる認識は、彼ら彼女らが低賃金労働を強いられる非常勤講師職に対し、不満を抱くようになる理由を示唆している。特に学振 PD や DC による研究奨励金²⁰を得ていない若手研究者の場合、それは顕著に見られる。学振 PD に採用されている C さんは、非常勤講師をあくまで教育経験を得るためのものと位置づけ、それゆえ非常勤講師の依頼を研究のために一部断りつつも、現状従事している非常勤講師職をおおむね肯定的に評価していた。これに対し、A さんは専業非常勤講師時代の経験を回顧して、その労働を「肉体労働」と呼称し、「1分1秒お金に変え」るものであると思いつつ続けていたと述べていた²¹。

しかし、このように非常勤講師職に対し不満を抱いたとしても、なぜそれを辞して別の職業に就くという選択を、多くの場合若手研究者は取らないのか。E さんはその理由の一つを次のように語っている。

今仕事をある程度してしまっているがゆえに、今までちょっと頑張って準備してしまったがゆえに……こんなにコストがいいことはないの。なんか、うまいこといかないかなと思っている。経路依存的な発想で非常勤を先に考えているんですけど、他の選択肢も、考えてないわけじゃないと思うんですけど、JREC-IN とか見たりしてい

¹⁹ こうした過程には、非常勤講師職の継続年数だけでなく、抱えているコマ数と、非常勤講師職への収入の依存度の高さも強く影響している。事実、本調査においても、多くのコマを抱えていた若手研究者（A さん、D さん、G さん）ほど、非常勤講師職の労働としての性質を強調する傾向にあった。一方 E さんや F さんのような、決して金銭的に余裕がない状況で非常勤講師職を勤めている（た）もの、コマ数をそれほど抱えていない研究者にはそうした傾向が見られなかった。

²⁰ 研究奨励金は、学振 PD・DC への採用により支給される、研究費とは別枠の給付金である。それぞれ月額 36 万 2000 円、20 万円（2022 年 2 月現在）であり、おおむね採用された若手研究者の生活費に充当されることが目的とされている。

²¹ もちろん、研究奨励金の有無によって、非常勤講師職をめぐる認識が全く異なるわけではない。たとえば B さんは家庭の事情もあり、学振 PD に採択されながら非常勤講師職の収入面もある程度重視していた。若手研究者の非常勤講師職に対する認識は、その人の研究者としてのキャリア形成の進捗状況などによって大きく左右される。よって、本節で示した非常勤講師職をめぐる若手研究者の認識の変化は、時間の経過とともに一律に生じるというよりも、何らかの事情で苦境に直面することにより、表面化するものと捉えるほうが適切であろう。

るので、そういうアルバイトも含めて。じゃないけど、なんとなく頭の中の優先順位では非常勤が先になっているという感じで、あんまり考えてないですかね。

Eさんは、当時DC2による収入で主に生計を立てていたが、DC2の採用期間が終了した後は、非常勤講師職や研究に関するアルバイトなどにより生計を立てることを想定していた。Eさんは非常勤講師職の給与の低廉性については理解している一方で、現在の非常勤講師職を手放してまで、新たな研究に関わる仕事を探すことについては消極的になっていると語る。それは、「経路依存的な発想」と自身で語っているように、非常勤講師職に関する経験を蓄積した段階で、新たな職務に就くことは、さまざまな観点より「コスト」が高いからである。はじめて非常勤講師職をこなすにあたっては、教材準備など多くの「コスト」を支払う必要がある²²。しかし、それが一旦支払われ、教材を繰り返し使用することができるのであれば、非常勤講師職は計算可能な収入源となる。

このように、非常勤講師職は初任での就労が比較的困難である一方で、一旦教育経験を得てしまえば雪だるま式に職を得やすくなり、授業用教材を類似の講義間で使い回すことができる。この特性は、若手研究者が非常勤講師職を複数コマ持つ方向へと経路付けるのである。非常勤講師職を複数コマ担当することは必ずしもキャリア形成に資するわけではないが、一コマ目の経験を活かすことで、比較的容易に収入を得ることができる。非常勤講師職は、このような経緯のもと若手研究者のなかで、不満がありながらも生計を成り立たせるために手放すことのできない労働へと姿を変えていくのである²³。

²² ただし、このEさんの現状認識が、コロナ禍によって後押しされていることは明記しておきたい。つまり、オンライン授業に移行したことによって移動時間が無くなったこと、類似授業であればオンデマンド動画を使い回せることなどが、「コスト」の軽減に強く影響しているのである。

²³ 若手研究者は何コマ程度であれば、教育経験をj得るための仕事として非常勤講師職を捉えることができるのか。この問いに対する回答は一概に示せるものではないが、たとえばDさんは、「週2コマ。まあ、まあちょっとお金余裕欲しいから3コマぐらい」であれば、PD・DCなどで生活に比較的余裕があったとしても、非常勤講師職を担当したいと回答していた。

5. 非常勤講師職への従事と研究者としてのキャリア形成が対立するとき

5.1 非常勤講師職の遂行による研究者キャリアの停滞という認識

こうした非常勤講師職と若手研究者の関係は多くの問題を含んだものだろう。先述したように、半期一コマあたりの給与は月額換算で2万円～2万5000円程度なため、学振DCと同等の金額を得ようとした場合、半期あたり8コマから10コマ程度を担当しなければならない。これは一般的なテニユア教員よりも多いか、少なくとも同等程度の授業負担である（文部科学省，2012）。実際Aさん、Dさん、Gさんといった、多くのコマを抱えていた若手研究者は、複数の大学で講義を掛け持つことの負担を語っていた。このように、複数の大学で講義を担当する必要があることを鑑みれば、非常勤講師職で生計を立てるといふ選択は、若手研究者のキャリア形成における「パラドクス」を生み出す可能性がある。

特にこの「パラドクス」は、博士後期課程から非常勤講師職を複数担当した場合に顕在化する。というのも、非常勤講師職の遂行による賃金獲得と博士号取得のための研究遂行は、双方が研究者としてあり続けるために必須であるにもかかわらず、限られた時間資源をめぐり対立すると、若手研究者の中で考えられているからである。

事実、比較的早期に非常勤講師職を得た若手研究者の事例は、そのことを物語っている。たとえばDさんは博士後期課程2年の段階で非常勤講師職を先輩の研究者から引き受けたのち、その後「先輩から降りてくる」かたちで多くのコマを抱えることとなる。その結果、Dさんは博士後期課程5年となった現在、通期で12コマを担当することにより、ほぼ非常勤講師職のみで生活を成り立たせることができるようになった。だが、その代償として現状「土日という概念を捨て」たとしても、研究ができる日は週に「2日取れたらいいかな」という状況となっている。こうした状況において、Dさんは博士論文の執筆に割くまとまった時間を確保することができず、それが「目下の悩み」となっているという。しかしだからといって、研究のために非常勤講師職を減らすという選択は難しい。「研究もしたい」とはいえ、「経済的に追い立てられるストレス」のほうがDさんにとっては「しんどいなと思う」からだ。

こうしたDさんの語りは、研究者キャリア形成のための非常勤講師職への就労によって、キャリア形成において不可欠な研究時間が次第に減少していくという、「パラドクス」を示すものと理解できる。もちろん、研究者として大学などの研究機関に就職する上で、投稿論文の数や博士号の取得といった、研究時間を要する狭義の研究業績の積み重ねのみが重要とは、必ずしも限らない²⁴。また、研究時間が多くのコマを抱えることで圧迫されたとしても、研究業績を積み上げることが不可能だというわけではないだろう。

²⁴ たとえば、研究業績に還元されないスキル（「実務家教員」としての業務経験や先端的な研究テ-

しかしここで重要なのは、少なくとも今回調査した若手研究者のキャリアをめぐる自己認識として、非常勤講師職の積み重ねよりも投稿論文や博士号の有無、学術書の出版のほうがかキャリア形成にとってより重要な要素であり、かつ非常勤講師職の遂行と研究業績の積み上げはしばしば相反する関係にあると捉えられていたということだ。こうした認識のもと非常勤講師職は、若手研究者の中で研究時間を犠牲にしても、「経済的に追い立てられるストレス」を軽減するために行う業務として受け止められることとなる。

Eさんはこの「パラドクス」の発生理由を別の観点から述べている。

DC2が切れたとき〔2022年4月〕に、とにかくご飯を食べつなぐということが私としては一番頭にあって。なので、もしそこで非常勤と研究の選択迫られたら、多分非常勤取ると思うんですよ私。もちろん一番いいのは研究に繋がる……非常勤だったり、何かしらアカデミックに関わるようなアルバイトでなんとか食いつなぐことをしなければいけないなということ、2022年かな、4月以降については考えているところです。で、博士号は多分その後というか、あんまり考えてないですね。2022年4月以降、それだけでご飯食べきれないだろうし、もんもんもんこう悩んでいる部分と、でも博士論文、そんなすぐ書けないよなあとか。身の回りに博士論文そんなにすぐ書けている人もいないですし。まあ分かんないですよ。私はこの調査が、今やってる調査がうまくいって、いいデータが、うまいこと論文が書ければ、うまくいくのかもしれないけど、まだ、学会誌の査読論文1本も通せたことないし……生活も支えていけるか分からないし、研究も何か全然うまくいってないし……とりあえず食べるほうをなんとかしなきゃなという、頭が、それ以上ちょっと考えられてないですね、うまく。

Eさんが先輩からの紹介によって、学振DCがない時期に非常勤講師を得ることができたこと、現在は学振DCによって主たる生計を立てていることはすでに確認した。重要なのは、こうした状況においてEさんが現状博士論文をすぐに出せないと考えており、それゆえに自らの悩みも増幅しているという点である。現在の自らの研究の進捗状況が決して芳しくはなく、また「身の回りに博士論文そんなにすぐ書けている人もいない」状況では、DCの任期中に博士論文を提出することや、博士号が必要となるポストへの就職は難しい。このように想定されているとき、非常勤講師職は自らが「アカデミックに関わるようなアルバイトでなんとか食いつなぐ」ために手放すことができない職であり、研究や短期的に

マなど)を身につけることで、研究者としてのキャリア形成を有利に進めることができる可能性はあるだろう。だが、そうした戦略について語っている人は今回のインタビューのなかには見られないことから、人文・社会科学系の若手研究者にとってメジャーな選択肢ではない可能性が高い。今回はあくまでも非常勤講師をめぐる検討であるため、若手研究者のキャリア形成をめぐる多様な戦略の分析については今後の課題としたい。

取得見込みが立たない博士号よりも優先されるべきものとされる。

こうした語りからは、非常勤講師職と研究業務が相反する関係にあるという認識のもと、若手研究者が非常勤講師職の遂行を優先するようになる理由を見て取ることができる。非常勤講師職は割が良い仕事ではないとしても、それに慣ればある程度安定した収入源となるため、生活の安定に資する。またそれは、「研究に繋がる……アカデミックに関わるようなアルバイト」であるがゆえに、若手研究者が研究者としてあり続けるための重要な「肩書」を与えるものでもあるだろう。このような認識が「研究も何か全然大丈夫にいかない」という認識と結びつく時、研究者であり続けるために研究活動よりも非常勤講師の遂行を優先するという「パラドキシカル」な状況が生じることとなる。

特に今回調査した若手研究者の研究分野では、今なお博士号取得に他分野以上の時間がかかる傾向がある（文部科学省科学技術・学術政策研究所，2022: 13）²⁵。この現状を鑑みつつ、自らの研究状況に照らして博士論文を早期に提出できる見込みがないと判断した場合、研究者生活の維持を可能とする生計手段の確保が優先されることになる²⁶。こうした理由によって、研究者キャリアの停滞をある程度覚悟しつつも、非常勤講師職の遂行を優先するという方針が、若手研究者の中で導かれるのである。

5.2 他の研究者とのコミュニケーション齟齬の発生

他方、非常勤講師職を主たる生計手段とすることの困難は、研究者であり続けるために研究時間を削るという「パラドクス」を生み出すという点にとどまらない。研究時間の使い方をめぐって、非常勤講師職を主たる生計手段としない研究者とのコミュニケーションに齟齬をきたすという点にも、キャリア形成のための活動がキャリア形成を阻害するという「パラドクス」を見出すことは可能である。

……非常勤講師の時代にも、他大学の先生から、プロジェクトに参加しないかって言われて、参加したことはあるんですけども、すごくやっぱりこう自分のプライドが

²⁵ 2018年コホートの博士後期課程修了（単位取得退学者含む）1.5年後の博士号未取得率は、総計24.6%である。ただ、分野別に見た場合、「人文」では56.1%、「社会」では48.7%、「その他」では50.1%と、人文・社会科学系の1.5年後の博士号未取得率は50%前後だといえる。これに対し、「理学」は20.1%、「工学」は14.4%、「農学」は17.8%、「保健」は18.1%である（文部科学省科学技術・学術政策研究所，2022: 13）。

²⁶ これは逆に言えば、非常勤講師職を早期に獲得しないほうが、研究者キャリアが進捗する可能性が高いということでもある。たとえば学振PDの獲得など、外形的にはキャリア形成に成功しているように見えるCさんが、「非常勤〔の準備が〕最初大変だった」ため、「4月から〔非常勤講師職を〕始めてたら下手すると〔学振PDの前提である博士号取得のタイムリミットである〕9月〔の博士論文の提出が〕間に合わなかったかも」と述べていることは、このことを傍証する。博士論文を早期に提出する見込みがある場合には、非常勤講師職よりも博士論文執筆を優先させ、逆に博士論文を早期に提出できる見込みがない場合には、博士論文執筆よりも非常勤講師職が優先される。このことは、非常勤講師職への従事の有無と博士論文の進捗の見直しによって、博士論文執筆期間が二極化する可能性を示唆している。

傷ついたと思ったことがあって。何かというと、自分と同一年で、同じキャリアで博士を取った後すぐ就職されている方と、非常勤をやっている自分とっていうふうな私たちで、同じプロジェクトのなかにいたときに、なんだやっぱり扱いが違うじゃないかとか、時間の使い方がすごく違ってて、なんかこう、専任の人たちの、その研究のプロジェクトのためだけに雇われている研究者の時間の使われ方を私にされると、私はものすごい、経済的に損失が大きいっていう、そういうことがすごくありました。

ここでAさんが、「プライドが傷ついた」要因として語っているのは、科研費プロジェクトにおける「専任の人たち」と自分の立場の違いそのものに起因する不平等感だけではなく、他の研究者との「時間の使い方」の違いによるディスコミュニケーションも含まれる。つまり、このAさんの立場を理解していないコミュニケーションが、大きなストレスを与えることになる²⁷。

一週間の上の何%を肉体労働としての非常勤に使って、何%を自分の研究に使って、残りの何%をじゃあその、〔プロジェクトに参加している専任教員に〕ただで参加させてあげてる。あるいは経験を積ませてあげているっていうふうに言われてるところに費やせるかっていうところの葛藤はすごく大きかったですね。

ここでAさんが持ち出すのは、自分の時間の使い方である。まずは非常勤講師が最初に時間を割くべき「肉体労働」として定式化される。自分の研究はその次であり、そしてさらにその残余として、Aさんのなかで科研費プロジェクトでの労務は位置づけられている。もちろん、こうしたプロジェクトへの勧誘自体が問題となるわけではない。というのも、実際にそれは若手研究者に「経験を積」ませることとして理解することができ、そこで得た経験や人脈によってその後のキャリアをより優位に運ぶことが期待されるからである。しかし、それが無給であるならば、生計維持のためにそのプロジェクトに割ける労力が限定されるのは当然である。だが、Aさんが割ける労力以上のことをプロジェクト側が求めてくるために、そこには「葛藤」が生まれる。

こうした「葛藤」が生まれるのは、雇用形態の差異がそのまま研究に対する姿勢の差異を生み出すからである。テニユア教員やPDなどに採用された研究者にとって、給与とは月額で安定的に支給されるものであり、それは本務校などで課せられている教育・学務や、

²⁷ もっとも、Aさんの研究者を目指す意欲が大きく削がれたのはこれが初めてではない。博士後期課程時にセクシャル・ハラスメントにあい、なおかつ大学のハラスメント委員会もAさんにとって十分な対応を行わなかったことから、「この状態で大学のなかでずっと研究続けるの無理じゃないかっていう気持ち」が生じたと語っている。幸い、Aさんはそのタイミングで留学が決定し、研究環境を変えることでモチベーションを維持することがかろうじて可能となっていた。

自らが行う研究全ての対価として支払われるものである。それゆえに、プロジェクトにおいて時間を使うことは、少なくともそれが他の業務を大きく阻害するものでなければ問題とならない。むしろそれは「経験」であり、将来のキャリアに資するものがあるとして、積極的に参加されるべき活動となる。

ところが、Aさんにとって給与とは日頃の非常勤講師職や塾講師職によって支払われるものであり、その額は働いた時間に応じて変動する。それゆえ、給与としないプロジェクトに参加し続けることは死活問題となる²⁸。それは、現在の収入源を失う危険を孕んだ、将来のキャリアを形成するどころか目の前の生活の安定性を損なうおそれがある活動となるからである。いわば雇用形態の差異が、研究者との間のコミュニケーションを困難にすることで、Aさんのキャリア形成は、研究時間の圧迫と、研究者ネットワークからの疎外という二つの観点より阻害された。研究者であり続けるための非常勤講師職への従事が、研究者であり続けることを、結果的により困難にしてしまったのである。

こうした「パラドクス」が発生するか否かは、周囲の専業非常勤講師職の割合や、若手研究者の境遇に対する理解²⁹次第だと考えられるが、キャリアが長期化し、専任教員との接点が多く生じてくる、博士後期課程修了後により顕在化する問題だと考えられる。このように研究活動と教育活動のバランス、キャリア形成と生活維持のバランスという点において、若手研究者は「パラドクス」をめぐる厳しい選択を迫られる。そしてその選択の困難は、元をたどると非常勤講師職が持つキャリア形成上の特性、すなわち複数コマの担当がキャリア形成に結びつかないにもかかわらず、本職からの全面的退出が心理的に難しい点によって生じている。

5.3 非常勤講師職で生計を立てながら研究者を続けることの可能性

一方で非常勤講師職が必ず研究者としてのキャリア形成に対し、負の影響をもたらすわけではない。先述したように、非常勤講師職は窮乏状態に陥った若手研究者にとって、研究者としてあり続けるためのセーフティネットになる面もあるからだ。先行研究でも論じ

²⁸ 特にAさんにとって問題となっていたのは、科研費プロジェクトにおけるミーティングおよび、そのための新幹線の利用を伴う移動時間の捻出によって非常勤講師を休まざるを得ない状況に置かれたことであった。Aさんはその科研費プロジェクトの研究員として雇用される内定を得ていたが、非常勤講師時代に時間の使い方をめぐって進めた交渉がこじれたため、最終的に内定を辞退している。

²⁹ もちろん、科研費プロジェクトをはじめとする共同研究プロジェクトへの勧誘が常に（専業）非常勤講師の働き方と対立するわけではない。Aさんの事例でも、当初から研究員として十分な給与が支払われたり、ミーティングに伴う移動が小さかったりすればあまり問題とならなかったかもしれない。よって、本研究は科研費プロジェクトが一般に（専業）非常勤講師の仕事に圧迫することで、彼ら彼女らの生活を困難に導く傾向があることを主張するものではない。ただし、Aさんの事例で強調しておきたいのは、このプロジェクトに参加している研究者の多くが、非常勤講師を経験したことがなく、それが辛かったとAさんが語っていることである。このような境遇の違いがコミュニケーションの困難をさらに強化する要因になったと考えられる。若手研究者のキャリア形成と科研費プロジェクトに代表される共同研究の機会の関係についての、より包括的な検討については今後の課題としたい。

られてきたように、非常勤講師職は研究者としての肩書確保や、最低限の収入をもたらすことで、か細い形ではあるが研究者としてあり続けることに貢献する。問題は、複数コマの担当がキャリア形成に結びつかないにもかかわらず、複数コマを抱えないことには生計を立てることが困難なことであり、そうした状況に若手研究者が陥りやすいことであろう。

また、若手研究者が「パラドクス」に巻き込まれるだけの受動的な存在ではないことも強調されなければならない。つまり、「パラドクス」は回避し得ないものではなく、若手研究者の努力によって、ある程度解消される可能性がある。

たとえば、Dさんは先述したように現在ほぼテニユア教員並みのコマ数を抱えているが、多くの効率化を行うことで、業務量を圧縮し、研究時間を確保していると語っている。最初に非常勤講師を請け負っていたときは、「授業準備って本当に終わりがなくて。自分でどこで区切りをつけていいのか分からず」、「本当、コメント見て、質問に答えて、で、次の週のスライド作って、とかしてると、本当に1コマ作るのに1日かかるみたいな感じ」であった。だが、現在では「学期途中でこっちが授業準備以外のことは極力したくないので、もう学期末のテストと日常、平常点みたいなかたちで全部の評価を付け」る方針に変更した。こうした例からも分かる通り、個々の研究者は非常勤講師職に適応していくなかで、できるだけ少ない労働負担で授業を運営できるように工夫を凝らしていく。非常勤講師職を続ける選択は、単に業務量の増加をもたらすわけではない。若手研究者が非常勤講師を主たる生計手段として生きていくことは、それなりの見通しをもって行われている。

こうした工夫が顕著に見られるのはGさんである。Gさんは当初より家計の事情から、他の研究者と比較して教育経験だけでなく収入の獲得に重きを置いていた。そのため非常勤講師職をいかに効率的にこなすかという問題の解決方策を、Gさんは明瞭に語っている。

1年目、2年目は結構意図的に、あんまりかぶらせないようにいろいろやったのがあって、要するに授業のストックのパターンを増やしたかったんですね。この授業が来たらこれとこれとこれを使いませばいいやっていうふうな感じの、ストックを作りたかったっていうのがあって。100コマぐらい話せる話があればいろんなところで使い回せるだろうというので、後は議題に合わせて多少アップデートされればいいだろうって感じで、1年目、2年目で結構準備したんですけど……で、やるときの工夫としてはですね。2個か3個ぐらいのパターンを越えないようにしてますね。1週間のなかで。つまり、科目名が違って、全部同じに合わせると死んじゃうので。労働工程上死んでしまうので、どう使い回せるかっていう範囲でカリキュラムを考えてました……カリキュラムのなかでここここ持ってくれば、15コマのうち13コマぐらいはいけるよなっていう感じで、持っていくストックを作りたかったっていうのが1年目2年目っていう感じですね。

Gさんは、比較的コマ数が少なかった初年度の段階で、あえて複数の授業内容を作成し、「100 コマぐらい話せる話」という授業ストックを蓄えておくことで、どのような非常勤の依頼が来てもすぐに対応できるような体制を整えていた。ほかにも、シラバスに「楽単」ではないような内容を記載する、教科書指定を行うなどによって、受講生数をコントロールするなど、労力の低減にさまざまな工夫を凝らしていた。このようなGさんの活動からは、若手研究者が非常勤講師職の効率化を通じて、研究者としてあり続けることを可能にしている様子を見て取ることができる。

また、効率化が唯一の解決策だというわけでもない。Gさんは非常勤講師職を通じた研究業績の積み上げ方法について、以下のように述べている。

〔非常勤講師職を遂行することは〕教科書を出すっていうインセンティブにはちょっと繋がるかなって感じはありますか。だから、共同研究とか論集とかのプロジェクトの基礎としてこういう論点があるよねっていうのを考えたりするっていうので結構、〔非常勤講師職での経験を〕使ったりとかはしますね。というのがなんか、やりがいのものっていうふうなことというのと、まあだから、僕は研究との連動ですねやっぱり、一番考えるのは、で、研究との連動からあまり離れると、教えるってことに特化するとやっぱりちょっときつくなってくるかなっていうのが、一つは思ってますね。

Gさんにとって、非常勤講師職とは、単に賃金を得るためだけでなく、「共同研究とか論集」を作るためのアイデアを温め、具現化させるために必要な経験でもある。事実、Gさんは教育経験と関連づけて編著本の作成を行っていた。このことは、非常勤講師職の遂行に追い立てられていたとしても、若手研究者がその状況を生かし、新たな研究成果を生み出しうることを伝えている。

もちろん、こうした作業の遂行にあたっては、編著本に寄稿してもらう研究者を確保するだけのネットワーク形成や、出版社とのコネクション確保などそれ相応の仕事をこなさなければならず、この事例を一般化することはできない。むしろこの事例から分かるのは、教育経験獲得以外の観点から、非常勤講師職に関連する業務を研究者としてのキャリア形成に資するものとして位置づけるためには、多くの労力を払わねばならない事実であろう。

とはいえ、こうしたGさんの取り組みからは、非常勤講師職の遂行のために多くの労力を注ぎながらも、研究者であり続けるにはどうすればよいのかという問いに対する一つの答えが潜んでいる³⁰。「研究との連動からあまり離れると……教えるってことに特化する

³⁰ もちろん、今回のインタビューー全員が大学における研究者を唯一の目標として活動し続けていた

とやっぱちょっときつくなってくる」。この語りからもわかるように、G さんにとって研究者であるということは、自らの持ちうる時間をできる限り研究に投入可能な状況を指すのであって、非常勤講師職がその状況を作り出すことに資している以上、本職を手放すという選択肢はない。言い換えるならば G さんは、非常勤講師職の遂行を研究活動の一環として位置づけることで、困難な状況にありながらも「パラドクス」をできる限り回避し、研究者としてのキャリアを能動的に構築することができているのである。

わけではない。たとえば、A さんは研究者キャリアがうまく行かなくなりそうなときに、塾講師への転業を継続的に検討していた。A さんの主観としても、当時研究を継続することにはそこまでの魅力を見いだせず、むしろ A さんは、塾業界で非常に多岐にわたる仕事を担当したことで、研究者職よりもむしろ塾業界のキャリアのほうに見通しを持っていた。「博士〔論文〕書いた時点で、本までまとめたって気持ちもちょっとあった」が、「生活がともかく成り立たなかった」からこそ、研究者としての将来のキャリアにそれほど期待できなかったためである。A さんは塾に就職した場合、研究を継続しない予定だったと語っていた。しかし、最終的に A さんは博士号を取得した後、比較的早期にテニユアを取得したため、最終的にアカデミアにおけるキャリアから退出することはなかった。あるいは、E さんは博士後期課程に進学するつもりだったものの、博士後期課程入試に失敗したため進学することができなかった。そこで一旦博士後期課程に進学することを断念し、非正規雇用の大学職員として働き始めるとともに、その大学にも籍を置くことで、研究活動を「趣味」として割り切りつつ、継続していた。その後、大学職員を辞め、特任研究員として別の研究機関に業務委託契約で所属したものの、その不安定な待遇ゆえに契約が打ち切られる。その後、別の研究機関の特任研究員に偶然雇用されること決定し、そこで1年半勤めている間に博士後期課程の入試を受け直して、2019年4月から修士とは異なる大学院に入学している。このような事例は、現状研究者として生計を立てている人のなかでも、研究者であり続けることを困難に感じた経験が珍しくないことを示している。もっとも、今回のインタビューで研究の断念を具体的に想定していたのは A さんに限られ、キャリア形成とは異なる視点から趣味として研究継続を検討・実行していたのは E さんに限られている。アカデミアからの離脱の有無をめぐる、若手研究者のキャリア意識の検討のためには、より多様なインタビューの確保が必要である。その点については今後の課題としたい。

6. 結論

6.1 本研究の知見

本研究では、インタビュー調査を通して、人文・社会科学系若手研究者のキャリア形成において、非常勤講師職がいかなる役割を有しているのか、そしてなぜ彼ら彼女らがさまざまな困難を抱えながらも、非常勤講師職に従事し続けているのかを示した。

第一に本研究は、若手研究者が低賃金職である非常勤講師職になぜ就こうとするのかを明らかにした。先行研究は肩書を持つ重要性を強調していたが（熱田，2014）、それ以上に、今回のインタビューの間では非常勤講師職は研究者としてのキャリア形成のために不可欠な教育経験を得る貴重な契機として捉えられていた³¹。また、彼ら彼女らは本職への参入は容易なものではないとも考えていた。非常勤講師職の採用が多くの場合インフォーマルに行われていることもあり、若手研究者は低賃金であったとしても、非常勤講師職の打診が来た場合断るといった選択肢を持ちにくい。

第二に本研究は、若手研究者がなぜ非常勤講師職を継続するのかを明らかにした。非常勤講師職の遂行自体はキャリア形成上不可欠なものである一方で、その継続の価値は薄いという見解は、今回インタビューとなった若手研究者のなかで共有されている。にもかかわらず、若手研究者が非常勤講師職を離脱することがないのは、初任時には多くの業務負担が必要な一方で、2年目以降は比較的low負担で業務遂行が可能であるとみなされているからである。特にしばしば若手研究者が、教育経験の獲得だけでなく、自らが希望する教育実現のための場として、初任の非常勤講師職を捉えることはこのことを助長する。

先行研究は、非常勤講師で「やりたいことがやれる」特徴が若手研究者を「やりがい搾取」に追い込む一つの要因であると主張していた³²（ケイン，2020：25）。たしかに、こうした特徴が非常勤講師就任初期に現れるのは間違いない。だが、本研究が明らかにしたように、そうした「やりがい搾取」の発生は、教育経験獲得という目的が初任時の過度な労働を正当化し、かつ教育経験の獲得という意義が失われた後も、支払われたコストの観点から、若手研究者は非常勤講師職から退出するという選択肢を取りづらいうことによつて

³¹ もともと、これは熱田（2014）と本研究の調査時期の差によって生まれた違いかもしれない。非常勤講師をめぐるより詳細な通時的検討は今後の課題としたい。

³² このように非常勤講師職の苦境を捉えた場合、「やりがい搾取」の状況を自覚して、自ら労働量を減らすことで苦境を脱することが可能となるという見解が導かれる可能性がある。しかし、本研究が示したのは、一つ一つの授業に対する労働量を減少させたとしても、それによって一層非常勤講師を効率的に行うことができるため、非常勤講師の掛け持ちを助長しうることである。

生じている。4章で示したように、若手研究者は非常勤講師職の賃金の安さに不満を持っていたとしても、本職から退出することはせず、むしろコマ数を増やすなどして、非常勤講師職によって生計を成り立たせようとしていた。先行研究で問題化されていた状況があるにもかかわらず、なぜ若手研究者が非常勤講師職から退出しないのかを考える上で、若手研究者のキャリア形成における、本職の二重の役割を無視することはできない。

第三に本研究は、非常勤講師職の遂行が、先行研究で指摘されてきた問題とどのように関わるのかを論じた後、若手研究者がこの問題にいかに関面・対処しているのかを確認した。非常勤講師職の遂行によって生計を立てようとする彼ら彼女らの試みは、研究時間の不足という認識や、時間の使い方をめぐる見解の差異などによって困難に晒される。こうした事象は、キャリア形成のための活動がいつしかキャリア形成の阻害要因になるという、野村（2019）が言うところの「パラドクス」を示したものとして理解可能であろう。

とはいえ、非常勤講師職によって生計を成り立たせようとする若手研究者が、これらの困難をただ甘受しているわけではない³³。非常勤講師職の遂行は経験の蓄積によって効率化が可能であり、研究との関係を構築することが可能なものでもある。もちろん、本研究が取り上げた取り組みが、すべての研究者に対し推奨されるわけではない。そうではなくここで重要なのは、困難な状況にあるとみなされる専業非常勤講師といえども、その多くはそれなりの見通しをもって自らのキャリア形成を行おうとしている点を見逃すべきではないということだ。非常勤講師職の「やりがい搾取」性のある程度自覚しつつ、若手研究者は活動している。そしてキャリア形成のための仕事がキャリア形成の阻害要因となったとしても、若手研究者はその状況に対処しようとしているのである。

非常勤講師職に関する先行研究（熱田，2014；ケイン，2020）は、本職の構造的問題や若手研究者の不遇を強調するがあまり、本職の持つ研究者としてのキャリア形成における特有の役割を見逃してきた。しかし今まで述べてきたように、若手研究者はただ搾取される存在ではなく、そのときの状況に対処しつつ、キャリア形成を進めている。そうであるならば、このような「当事者の論理」を明らかにし、いかにして非常勤講師職に関する問

³³ 野村（2019）が示す「夢追いネットワーク」の事例では、当事者たるバンドマンにとって自覚されにくい搾取構造として「パラドクス」が描かれており、バンドマンはやや受動的な存在として描写されている。これに対し、本研究は野村（2019）の分析枠組みに準拠しながらも、「パラドクス」に遭遇する若手研究者の能動性をより強調する立場をとっている。なぜなら今回のインタビューは「パラドクス」に直面していることを自覚しつつ、それでも研究者としてのキャリアを形成し続けようとしているからである。その意味で、本研究における若手研究者は、松永（2017）が対象とした、キャリア継続の観点から自覚的に低賃金職に従事し続ける、アニメーターに近い存在として捉えられる。

題が形成されているのかを探らないことには、本職に関する問題解決の糸口を見つけることは困難であろう³⁴。そのために、本研究は近年の高等教育研究と労働社会学の知見を参照することで分析を行ったのだった。

6.2 今後の展望——「パラドクス」を脱することはいかにして可能か

このように、本研究は非常勤講師職と若手研究者のキャリア形成間の複雑な関係を描き出した。一方でこうした若手研究者の現状や「パラドクス」を、研究者であれば誰もが知っている自明のこととして捉える人がいるかもしれない。しかし重要なのは、こうした知識は多くの場合、研究者ネットワーク内の先輩院生や指導教員などからインフォーマルな形で自明のこととして知らされるものだという点である (Skakni, 2018)。よって、キャリア形成に関する具体的なイメージや、非常勤講師職の遂行に関する知識は、若手研究者のなかで平等に分配されているわけではない。大学内の研究会に代表される、インフォーマルな研究者ネットワークとの繋がりや強さは、当然人によって異なるからである。

事実、本調査において聴取したインタビューのなかでも、非常勤講師職のキャリア形成上の役割をいつ頃から気にかけるようになったかについては差異が見られ、かつそれは他の研究者との交流の強度に起因しているように思われた。たとえば、博士後期課程時より非常勤講師職の獲得と博士論文の執筆等の研究業績の蓄積に腐心していたBさんやCさんは、そうした気持ちが研究科内や研究会で出会う他の若手研究者との比較によってもたらされていたと語っていた。あるいは、非常勤講師職の遂行による研究時間の圧迫に苦しみながらも、研究者であり続けながらこの状況を打開することが難しいと感じていたAさんは、大学院生時代に他の若手研究者との交流機会は少なかったと語っていた。これらの語りは、研究者ネットワークがキャリア形成に与える影響をある程度示すものだろう。

もちろん、本研究の知見は研究者ネットワークの強度がキャリア形成に正の影響があることを論証するものではない。だがGさんがどの大学に所属するかで手に入る知識の量・質が異なることによって、「あまりにも……キャリアパスの有利不利の差」があると語っ

³⁴ 日本における自然科学系のポストドクを対象とした高等教育研究では、アカデミックキャリアからの転向をめぐる心理等について、質的調査がなされてきた (岩崎 2015)。他方で、そもそも待遇 (任期・給与・研究費等) が悪く将来の見通しが立ち難い状況で、いかにして各々の研究者が研究活動を継続しているのかについては問われてこなかった。もちろん冒頭で確認したように、自然科学系分野における非常勤講師職は稀であり、彼ら彼女らのキャリア戦略は人文・社会科学系のそれとは異なることが予想される。とはいえ若手研究者は待遇の悪さを踏まえ、それへの適応を試みつつ研究者キャリアを積み上げているという本研究の知見は、自然科学系研究者にも大枠では当てはまるものだろう。よって本研究の分析視座を援用しつつ、理系の若手研究者を対象とした検討を行う余地がある。

ていたように、研究者としてあり続けるための知識の偏在が、個々人の研究者としてのキャリア形成に大きな影響を与えることも、想像に難くない³⁵。

本研究が着目したのは、キャリア形成のための活動がいつしかキャリア形成を阻害するものとして転嫁していくという「パラドクス」の発生である。だがこれは、少なくとも非常勤講師職に関するものに限れば、研究者ネットワーク内で局所的に共有されている知識が、若手研究者の中で広く共有されることによって、ある程度防げる可能性がある。先行研究は、若手研究者が非常勤講師職に時間を割くことで、研究時間を極端に減らすことを警戒していたが（吉田・堀内編，2017：28-9）、本研究が明らかにしたように、若手研究者もこうした警戒感自体を有していないわけではない。むしろ本研究が示したのは、彼ら彼女らがそれに気づいていたとしても、非常勤講師職の遂行に一定の時間を投入し続けることが当人にとって妥当な状況が生まれることである。そして、このような状況を回避する上でも、あるいはそうした状況下においてキャリア形成を行っていく上でも、研究者ネットワーク内で流通している知識は、重要な働きをしていると考えられる。

もちろん、こうした知識が行き渡ったとしても、非常勤講師職に代表される若手研究者が抱える諸問題が直ちに解決されるわけではない。そもそも、アカデミアにおいて能力主義に基づいた競争は前提とされることが少なくない。そうした状況下で、相対的に恵まれない研究者が出てくることや、アカデミアから離脱する研究者が出ること自体は、構造的に避けがたいという指摘もあるだろう。

しかし重要なのは、このような知の偏在はアカデミアにおける競争の前提を損なうものだという事だ。Gさんが述べたように、各個々人の研究者のスタートラインが知識の差によって異なるという現状は、「能力」や「業績」による競争選抜を行う上でも決して望ましいものではない。各人がアカデミアの中で生き抜くための情報を共有できていることは、アカデミア内の競争原理が健全に働くための前提条件だからだ。

このことからわかるように、知の偏在という問題は若手研究者個々人の問題ではなく、アカデミア全体が抱える問題として検討されなければならない、非常勤講師職をめぐる問題もまた、その一環にあるものとして捉えられる必要がある。非常勤講師職を若手研究者のキャリア形成過程のなかに位置づけることを試みた本研究は、こうした観点より、より良いアカデミアを形成する試みの端緒としても提示することができる。

³⁵ 本研究から示唆された研究者ネットワークの強度とキャリア形成の関係性を検討するためには、より調査対象者を広げた分析が必要となるだろう。この点については今後の課題としたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19J12275 の助成を受けたものです。

引用・参考文献

- 熱田敬子 (2014) 「専任椅子取りゲームをこえて：大学に背をむける非常勤講師たち」『現代思想』42(6), 198-206.
- Chen, S., L. McAlpine, and C. Amundsen (2015) “Postdoctoral Positions as Preparation for Desired Careers: a Narrative Approach to Understanding Postdoctoral Experience”, *Higher Education Research & Development*, 34(6), 1083-1096.
- 林凌 (2020) 「人文学・社会科学系研究者にとって、「非常勤講師職」はどういう意味をもつか？—アンケート調査から見えたこと」『academist journal』<https://academist-cf.com/journal/?p=13412>(2022年2月25日アクセス)
- 岩崎久美子 (2015) 「理論物理学ポストドクターのキャリア形成の特徴と人材活用の方向性」『日本労働研究雑誌』57(7), 41-50.
- 上林陽治 (2021) 「専業非常勤講師という問題：大学教員の非正規化の進展とその影響」『社会政策』12(3), 73-84.
- ケイン樹里安 (2020) 「コロナ禍のオンライン講義と非常勤講師のやりがい搾取」『都市問題』111(12), 20-29.
- 松永伸太郎 (2017) 『アニメーターの社会学：職業規範と労働問題』三重大学出版会.
- (2020) 『アニメーターはどう働いているのか：集まって働くフリーランサーたちの労働社会学』ナカニシヤ出版.
- McAlpine, L., (2014) Over Time, How Do Post-Ph.D. Scientists Locate Teaching and Supervision within Their Academic Practice?”, *Teaching in Higher Education*, 19(8): 835-846.
- 水月昭道 (2007) 『高学歴ワーキングプア：「フリーター生産工場」としての大学院』光文社.
- 文部科学省 (2012) 『資料3 参考資料 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (第10回)』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/___icsFiles/afieldfile/2012/02/28/1317014_2.pdf (2022年2月25日アクセス)
- (2021a) 『中央教育審議会大学分科会質保証システム部会基礎資料』
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000119826.pdf> (2022年2月14日ア

クセス)

- (2021b) 「特集3 研究力向上のための若手研究者への支援」『令和2年度文部科学白書』https://www.mext.go.jp/content/20210720-mxt_soseisk01-000016965_1-3.pdf (2022年2月14日アクセス)
- 文部科学省科学技術・学術政策研究所 (2022) 「博士人材追跡調査：第4次報告書」
- 野村駿 (2019) 「不完全な職業達成過程と労働問題：バンドマンの音楽活動にみるネットワーク形成のパラドクス」『労働社会学研究』20(0): 1-23.
- 大理奈穂子 (2010) 「〈高学歴ワーキングプア〉は男性だけの問題か? : 非常勤講師/オーバードクターのジェンダー化された困難」『日本ジェンダー研究』(13), 71-86.
- Skakni, I. (2018) “Doctoral Studies as an Initiatory Trial: Expected and Taken-for-granted Practices that Impede PhD Students’ Progress,” *Teaching in Higher Education*, 23(8), 927-944.
- Wöhler, V. (2014) “To Stay or to Go? Narratives of Early-stage Sociologists about Persisting in Academia,” *Higher Education Policy*, 27(4), 469-487.
- 吉田壘・堀内多恵編 (2017) 『博士になったらどう生きる? : 78名が語るキャリアパス』勉誠出版.